

アーサー王伝説に親しむための五冊

新居 明子

「アーサー王」という言葉から何を想起するだろう。「騎士道」や「宮廷風恋愛」、あるいは音楽や美術に関心のある方であれば、ワグネルのオペラやラファエル前派の絵画の題材としてのイメージであろうか。宝塚のミュージカルや、『エクスカリバー』、『モンティ・パイソン・アノド・ホーリー・グレイル』等の映画作品、はたまた『Fate』シリーズ、『モンスターストライク』等のアニメやゲームを思い浮かべる方もいるかもしれない。文学や芸術、サブカルチャーの分野だけでなく、アーサー王伝説は政治の世界とも密接に関わってきた。十二世紀ブランタジネット朝や十六世紀テューダー朝では、アーサー王がイギリス王室の権威付けに利用され、冷戦期のアメリカにおけるケネディ政権時代のホワイトハウスは、アーサー王の城にちなんで「キャメロット」と呼ばれた。国内外の会議で広く開催される円卓会議は、もともとアーサー王の騎士たちが身分の区別なく平等に坐した「円卓」に由来することを存知だろうか。このように枚挙にいとまがないほど、中世ヨーロッパに起源を発するアーサー王伝説は、現代社会においてもなお、広く世界中で親しまれ、文学に限らず様々な分野における創造力の源泉となっている。

そもそもアーサー王とはいったい誰なのか。アーサー王は偉大な王として、アレキサンダー大王やカール大帝と並び称されてきた。しかし、

他の二人の英雄王とは異なり、アーサー王の歴史的実在性の裏付けはない。イギリスでは十七世紀頃まで実在の王と認識されていたようだが、十七世紀、十八世紀の啓蒙時代においてその史実性は否定された。現在の定説は、アーサーは王ではなく、五、六世紀にブリテン島に侵入してきたサクソン人と戦った、ブリトン人の指揮官だったというものである。ここでは、こうしたアーサー王の起源から現代日本での受容にいたるアーサー王伝説の諸相を理解するための、日本語による文献を五冊紹介したい。

① リチャード・バーバー著、高宮利行訳『アーサー王——その歴史と伝説』東京書籍、一九八三年

本書は、Richard Barber による *King Arthur in Legend and History* (The Boydell Press, 1973) の翻訳である。本邦初の本格的なアーサー王研究の翻訳書として本書が一九八三年に出版されて以来、優れた関連書籍が数多く出ているものの、いまだに本書は日本における入門書・概説書の決定版とみなされている。それは、翻訳者の高宮利行氏が末尾の解説で述べているように、本書がアーサー王伝説に関する基本的な説明に多くのスペースを割いていることに依るところが大きい。また、本書の冒頭

には、アーサー王に関連する中世の美しい写本や十九世紀の絵画等、カラーを含めた六〇点もの図版があり、絢爛たるアーサー王の世界に触れることもできる。斯界になじみのうすい専門外の方や学部学生には、まずこちらでアーサー王伝説についての概略を理解してもらうことをおすすめする。

本書は、アーサー王のモデルと目される無名の指揮官の勝利を記録した六世紀ギルダスの『ブリテンの滅亡と征服について』から、アーサーという名前が初めて歴史書に登場する九世紀ネンニウスの『ブリトン人の歴史』、さらにウェールズ人の口頭伝承や聖者伝、そして大陸を統べる帝王としてのアーサー王の生涯を描いた十二世紀ジェフリ・オブ・モントマス『ブリテン列王史』までの、アーサー王伝説の複雑な初期形成期について、考古学、地理学、文献学等にも幅広く言及しながら、わかりやすく解説している。さらに、モンマス以降、フランスやドイツそしてイギリスで花開くアーサー王ロマンス作品の数々についても具体的に論じている。

本書で興味深い点は、最終章「不朽の名声」の冒頭で取り上げられているアーサー王の政治利用についてであろう。古今東西、神話や伝説と政治には密接な関係がある。イギリスの全盛期を誇ったテューダー王朝の時代にも、アーサー王伝説を王権の権威付けに利用した形跡が残されている。テューダー朝を開いたヘンリー七世は、自分がイギリスの先住民族であったウェールズ人の血を引く王であることを強調するために、跡継ぎの皇太子に、ブリトン人が崇拜する英雄王にちなんで「アーサー」と名付けた。あいにく皇太子アーサーは十六歳という若さで急逝したため、アーサー二世は誕生しなかった。しかしその後モアアサー王の主題は様々な場面で浮上し、エリザベス女王の時代には、テューダー王家の祖先にアーサー王を追加するという家系図の捏造まで行われたという。なお、本書では扱われていないが、十二世紀ブランドジネット朝ではフランスのカペー家に対抗する手段として、また十九世紀ヴィクトリア朝では帝国主義支配の強化のために、アーサー王伝説が利用されたことも知られている。

② トマス・マロリー著、厨川文夫・厨川圭子訳『アーサー王の死』ちくま文庫、一九八六年

アーサー王の物語は愛と武勇の物語である。ただし、アーサー王物語を、魔法使いや竜が登場する子供向けの単純な冒険物語と考えているとしたら、それは人間の愛憎や運命がもたらす悲劇を描くアーサー王物語の、ごく一部しかみていないことになる。ここで描かれている「愛」とは、王妃グイネヴィアと円卓の騎士ランスロットの不義の愛であり、二人とアーサー王の三角関係が物語の要となっている。またアーサー王自身略奪婚という状況下で誕生しており、最後にアーサー王と王位を巡って争うモードレッドは、アーサー王と異父姉の近親相姦で生まれている。アーサー王の物語は、実は子供には不適切ともいえる非倫理的な要素を多分に含んでいるのである。

アーサー王の物語の大まかな筋書きを理解するにあたっては、十五世紀トマス・マロリーの『アーサー王の死』をおすすめしたい。『アーサー王の死』は、中世フランスやイギリスで開花したアーサー王と円卓の騎士の一大物語群の集大成である。イギリスにおける活版印刷の創始者ウィリアム・キャクストンは、写本として手で書写されていたマロリーの作品を、『アーサー王の死』(Le Mort d'Arthur)というタイトルで一四八五年に出版した。このキャクストン版がマロリー唯一の原本に基づくものとして、その後約四五〇年間にわたり多くの作家や詩人たちに影響を与えたのである。ところが、一九三四年にウインチェスター大学で、より古い別の写本が発見された。これが現在ウインチェスター版として知られるもので、キャクストン版に比べてよりマロリーのオリジナルに近いと考えられている。

残念ながら、ウインチェスター版の完訳(中島邦男、小川睦子、遠藤幸子訳『アーサー王物語』青山社、一九九五年)は現在絶版である。そこで、ここでは比較的手が容易な、厨川夫妻の編訳によるキャクストン版を紹介したい。こちらは抄訳であるため全体の六割近くが割愛されているものの、アーサー王伝説の原典とも集大成ともいべき『アーサー

王の死』の主要なエピソードを、平易な文章で網羅しており、アーサーの誕生から円卓の崩壊までの、全体の骨子を理解するのに役立つものと思われる。

③ マーク・シルアード著、高宮利行・不破有理訳『騎士道とジェントルマン——ヴィクトリア朝社会精神史』三省堂、一九八六年

アーサー王は、「暴虐を働かず、裏切りを避け、常に婦人や乙女のために尽くし、正当な理由なくしては決して戦わぬよう」、円卓の騎士たちに命じている。これらは、円卓の騎士が守るべき騎士道の掟である。しばしば日本の「武士道」とも対比される「騎士道」とは、もともと中世ヨーロッパの騎士階級の行動規範であった。正義、忠誠、礼節等の美德に示される騎士道の理念は、時代とともに変化しながら、セルバンテスの『ドン・キホーテ』等の様々な文学や芸術作品の題材として取り上げられ、精神的拠り所として社会通念にも影響を及ぼしてきた。

本書は、建築史家 Mark Girouard による *The Return to Camelot: Chivalry and the English Gentleman* (New Haven and London: Yale University Press, 1981) の全訳である。ここでは、ヴィクトリア朝のイギリスにおいて、中世の騎士道が、ジェントルマン階級の人々が理想とする行動規範に多大な影響を与えた様相を、建築、絵画、彫刻、文学、さらには政治上の豊富な実例を通して詳細に検証している。特に注目すべき点は、十九世紀末には騎士道がジェントルマンという個人のレベルを超えて、ボーイ・スカウトやパブリック・スクール、スポーツ・チームなどの団体レベルにまで浸透し、さらに二十世紀初頭に勃発した第一次世界大戦時には、イギリス社会全体が掲げる行動規範となったことである。騎士道の理想は、戦争における英雄的行為や自己犠牲の精神の高揚に利用された。本書にはカラーの図版が豊富に挿入されているが、そのなかに「BRITAIN NEEDS YOU AT ONCE」(p. 277) という、兵隊徴募のための議会発行ポスターがある。ポスター中央部には、白馬にまたがり長槍を持った騎士が大きな竜と戦っている勇猛な絵が描かれており、騎士道精神が国民の

戦意発揚に影響を与え利用されていたことがうかがわれる。

なお本書は『騎士道とジェントルマン』という邦題からも明らかのように、ここで紹介する他の四冊とは異なり、「アーサー王伝説」を中心に据えているわけではない。むしろ本書の主題である「騎士道」を論ずるうえで、その根底にあるものとしてアーサー王伝説を取り上げている。例えば、本書の第十二章「アーサーの再臨」では、アーサー王伝説に関する社会的関心の推移の過程を詳しく論じており、特に十九世紀ヴィクトリア朝の、偽善的道德主義におけるアーサー王伝説の偏った解釈についての論考は興味深い。

④ 中央大学人文科学研究所編『アーサー王物語研究』中央大学出版部、二〇一六年

本書は、中央大学人文科学研究所の「アーサー王物語研究」チームが、日本における多岐にわたるアーサー王伝説の受容と研究の成果をまとめた論文集である。中世ウェールズの『マビノギオン』から現代のアーサー王物語作品までの、最新の研究動向を知るうえで、必読の一冊といえる。ちなみに研究チームの主旨は、二十年ほど前に名古屋外国語大学外国語学部フランス語学科でも教鞭をとっておられた渡邊浩司氏である。

本書は四部構成となっている。第一部「アーサー王物語の源流」では、アーサー伝承が確認できる八世紀から、古フランス語散文による聖杯物語群が成立する十三世紀までを扱っている。ここではまず、中世フランス文学の世界的権威であるフィリップ・ヴァルテル氏によるアーサー王物語の成立と展開に関する論考の後、アーサー王物語が形作られる前段階としての、ウェールズの伝承文学が考察されている。第二部「円卓騎士の諸相」では、円卓の騎士のうちケイ、モードレッド、ガウェインが取り上げられている。第三部「オランダと北欧のアーサー王物語」では、これまで日本で紹介されたことのない中世オランダ語で書かれたネーデルランドのアーサー王作品や、アーサー王伝説に題材を取ったフェロー語によるバラッドが論考の対象となっている。第四部「近現代のアーサー

王物語」では、マーク・トウェインの『アーサー王宮廷のコネティカット・ヤンキー』、『指輪物語』で知られるJ・R・R・トールキンの『アーサーの顛落』、ミシェル・レリスの自伝、そしてクリスティーナ・ペリ・ロッシの『狂い船』という四作品が取り上げられ、分析されている。

アーサー王伝説は、年代記や聖人伝、吟遊詩人による口承詩などの影響を受けながら、多様な文学作品を通して形成され、ヨーロッパ各地に流布していった。本書は、これまでの研究対象の主流であるイギリス、フランス、ドイツのアーサー王作品だけでなく、中世ウェールズやネーデルランド、北欧の作品などをも対象としており、アーサー王の成立過程やその影響を幅広く理解することができる。

⑤ 岡本広毅・小宮真樹子編『いかにしてアーサー王は日本で受容されサブカルチャー界に君臨したか——変容する中世騎士道物語』二〇一九年

最後に紹介するのは、岡本広毅氏と小宮真樹子氏編の、『いかにしてアーサー王は日本で受容されサブカルチャー界に君臨したか』である。近年のライトノベルや実用書・ビジネス書にも顕著な本書の長いタイトルは、実はトマス・マロリーのキャクストン版『アーサー王の死』の目次に付記されたフリーズへのオマージュであり、また本文の赤と黒の二色刷りは、ウィンチェスター版に倣ったものである等、細部にいたるまで、編者と執筆者たちのアーサー王と円卓の騎士たちに対する愛情と情熱が詰まった一冊である。

西洋文化の礎ともいえるアーサー王にまつわる英雄譚は、啓蒙時代における一時的な減退期を除き、何百年もの間人々を魅了し続け、文学や絵画、彫刻、音楽などの様々な分野の主題となってきた。二十世紀に入ってから、一九〇四年の『パルシファル』（エドウィン・ポーター監督）にはじまり現在にいたるまで、ゆうに百本以上の関連映画やテレビドラマ作品が作られ、ミュージカルやオペラ、バレエ等の様々な舞台でも演じられている。さらに近年は、特に日本においてその領域をアニメ、漫画、ゲームにまで拡大し、今やアーサー王と円卓の騎士たちは、人気キャラ

クターとして広く認知されているのである。

本書が目指すところは、「序文」で述べられているように、「学問と娯楽の懸け橋となる」ことである。このコンセプトに従って、執筆陣は国内外の中世英文学研究の大家から著名な児童文学作家、漫画家と大変幅広く、中世ヨーロッパで生まれたアーサー王が、日本でどのように享受され変容してきたかに焦点をあてながら、専門家だけでなく一般読者も楽しめるよう目配りされている。

本書は三部で構成されている。第一部「受容の黎明期」では、明治時代の日本人による西洋の「騎士」の図像形成過程についての考察や、本邦初のアーサー王作品となる夏目漱石の短編小説『薙露行』とテニソンの「シャロットの女」の比較分析等、学術的な論考が集められている。第二部「サブカルチャーへの浸透」では、宝塚歌劇団のミュージカル『ランスロット』や、ゲーム『Fate』シリーズ等の多くのサブカルチャー作品が詳細な分析とともに取り上げられており、専門知識を持たない若い読者には特に興味深い部分ではないかと思われる。最後の第三部「君臨とさらなる拡大」では、受容の範囲を日本から世界に拡大し、児童文学作家の斉藤洋氏によるアーサー王伝説のリライトに関するエッセイ、カズオ・イシグロの『忘れられた巨人』に関する論考、そしてアーサー王伝説研究の世界的権威であるアラン・ルパック氏による英米のポップカルチャーにおけるアーサー王についての特別寄稿がある。

神話・伝説の英雄や歴史上の偉人は数多く存在するが、アーサー王ほど広く愛好され浸透している人物はいない。本書の幅広い執筆陣と学術と娯楽にまたがる多彩な内容は、中世から現代にいたるまで、衰えることを知らないアーサー王伝説の人気の秘密の一端を明らかにしているといえる。

注

(一) Kevin J. Harty, ed., *Cinema Arthuriana: Twenty Essays*, rev. ed. (North Carolina: McFarland, 2002), pp. 254–301.